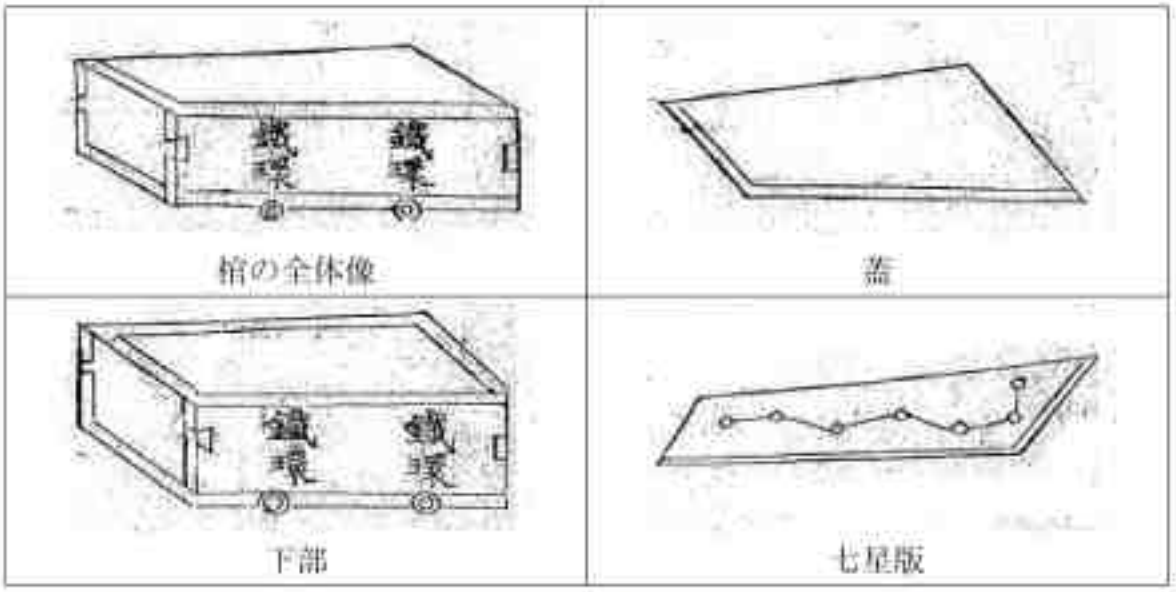
家礼その４～喪礼

第１章　初終

危篤になったら、正寝（表座敷）に居場所を移します。［およそ危篤になったら、正寝（表座敷）に居場所を移し、内外は安静にして、そうして息が絶えるのを待ちます。男子は婦人の手のなかで息を絶やしませんし、女子は男子の手のなかで息を絶やしません］。息が絶えてしまったら、そこで大声をあげて泣きます。復（たまよばい＝死者が息を吹きかえすのを願う儀式）を行います。［従者の一人は、死者の上服で、死者の着たことのあるものを使って、左は襟首を持ち、右は腰帯を持ち、部屋の中央に登ります。北に向いて、衣を使って招きながら、三度「某人復」と呼びかけて言います。終わったら、手に持っていた衣を巻き、降り、遺体の上を覆います。男女が胸を打ちながら大声をあげて泣く回数は、無数です。上服とは、仕官している人は公服を言い、仕官していない人は襴衫（すそべりのついた衣服）、皂衫、深衣（礼服）を言い、婦人の場合は大袖の背子（女性の礼服）を言います。某人（死者）を呼ぶには、生前の呼び名を呼ぶようにします］。喪主を立てます。［およそ主人とは、長男です。いないときには長孫（最初の孫）が葬式の責任者となって、お供え物をして祭ります。葬式の来賓を礼遇するときには、同居の親族のうちで目上の人がこれをつかさどります］。また、主婦を立てます。［亡くなった人の妻を言います。いないときには、喪主の妻となります］。また、護喪（喪主を手伝う人）を立てます。［子弟のうちで礼を身につけており、有能な人を護喪とします。およそ喪礼に関する事柄は、この人にすべてあずけます］。また、司書（記録係）と司貨（出納係）を立てます。［子弟もしくは使用人に担当させます］。そこで着替えて絶食します。［妻子、側室は、その全員が冠と上服を取りおり、たばねた髪をほどきます。男子は、上衽（礼服の前襟）を扱い、はだしになります。その他の服喪する必要のある人は、華飾（装飾品）をすべて取り去ります。もとはその家の父母から生まれたものの、今は他家の後継ぎとなっている人、そして、女子のうちで、すでに嫁いでいる人は、その全員がたばねた髪をほどき、はだしになります。諸子（子たち）は、三日間の絶食をします。九か月の期間の喪は、三日間の絶食です。五か月や三か月の喪は、二日間の絶食です。親戚や同郷の人は、お粥をつくって絶食の人に食べさせます。尊長（目上の人）は、絶食の人に少食を強いてもさしつかえありません。上衽を扱うとは、衣服を前襟の帯にさしはさむことです。華飾とは、錦繍、紅紫、金玉、珠翠の類を言います］。棺を治めます。［護喪（喪主を手伝う人）は、大工に命じ、木を選んで、棺をつくります。油杉が最上で、柏が次で、土杉が下となります。その制式は、四角で真っすぐで、頭が大きく、足が小さく、体が入るだけを取ります。高くて大



きなものにしたり、軒が広くて足が高いものをつくったりさせてはいけません。内と外は、すべて漆喰を塗ります。内側には灰清（松やにと油を混ぜた塗料）を溶かして流しかけることを使用し、厚さは半寸以上です。煉熟糯米灰（練って蒸したもち米を灰にしたもの）でその底を舗装し、厚さは四寸ばかりです。七星版を加えます。底の四隅にはそれぞれ大きな鉄のリングを釘でつけ、動かすときには大きなロープを使ってこれを持ち上げます。司馬公は、こう言っています。「棺は厚くしたいですが、しかしながら厚すぎるときには、重たくて遠くに持って行くのが難しくなります。さらに必ずしも高くて大きなものにする必要はなく、墓地を選定するにあたり、穴の中を広くさせれば、破損させやすくなります。これについて深く注意すべきです。椁（棺を入れる外箱）は、聖人が制定したものであり、昔から使っているとはいえ、木の板は時間が経てば最後には腐蝕してしまうものであり、むだに穴の中を広く大きくさせれば、堅固にできません。これを用いないほうがよいです。孔子は、鯉（孔子の息子）を葬るにあたり、棺はあっても椁（棺を入れる外箱）はありませんでした。さらに、貧しい人が速やかに葬って椁（棺を入れる外箱）をなくすことを許しています。今、使いたくないのは、貧しいからではなく、なきがらを安置したいからにすぎません」。程子は、こう言っています。「雑書（世俗の書物）には、松脂が地中に入って、千年が経過すれば茯苓となり、一万年が経過すれば琥珀となるという説があります。思うに、これほど長持ちするものはありません。ですから、それを使って棺に塗るのです。昔の人は、これを使ったりすることがあっていました」]。親戚や同僚に訃報を知らせます。[護喪（喪主を手伝う人）、司書（書物の管理人）は、訃報を知らせるために手紙を書きます。もしないときには、主人がみずから親戚に訃報を知らせ、同僚には知らせません。それから手紙で安否を問うことは、すべて止めます。手紙で弔いを伝えてきたときは、

いずれも卒哭（死後１００日目）が過ぎるのを待ってから、返事をします]。

第２章　沐浴、襲、斂、為位、飯含

執事は、幃（周りを囲む幕）と牀（細長い寝台）を用意し、尸（遺体）を移動させ、穴を掘ります。[執事は、幃幃（周りを囲む幕）をして、その内側に遺体を横たわらせます。従者は、牀（細長い寝台）を尸（遺体）の牀（細長い寝台）前に用意し、これを好きに置き、簀（すのこ）を広げて薦（敷物）を取り去り、席（敷物）と枕を用意し、尸（遺体）をその上に移動させます。首を南にして、衾（夜具）をかぶせます。目立たなくて、きれいな場所に穴を掘ります]。襲衣（遺体に重ね着させるもの）をならべます。[卓子（机）を使い、堂（表座敷）前の東の壁の下にならべ、西の襟を前にし、南が上です。幅巾（頭をつつむ布）１つを使います。充耳（耳につめる飾りもの）２つは、白い綿を使い、棗の種の大きさくらいにします。これは耳を塞ぐためのものです。幎目（死者の顔をおおく布）は、縦と横の寸法が１寸ずつの四角い絹とします。これは顔を覆うためのものです。握手（死者の手を結ぶ布）は、２尺×５寸の長方形の絹を使います。これは手を隠すためのものです。深衣（礼服）は１つ、大帶は１つ、靴は２つです。袍襖（上着）、汗衫（女子用の上着）、袴襪（袴と足袋）、勒帛（腰をたばねる帯）、裹肚（腹巻き）の類は、場合に応じて数量を決めて使います]。また、沐浴（髪や体を洗って身を清めること）、飯含（死者の口の中にものを含ませること）に使う道具を用意します。[卓子（机）を使い、堂（表座敷）前の西の壁の下にならべ、南が上です。銭３つを小箱に入れます。米２升は、きれいな水を使って洗い、盤（お椀）に入れます。櫛は１つ、沐巾（髪を洗うための手ぬぐい）は１つ、浴巾（体を洗うための手ぬぐい）は２つで、上半身と下半身でそれぞれその１つを使います]。そこで沐浴します。[従者は湯を持って入り、主人以下全員が帷（とばり）の外に出て、北に向きます。従者は髪を洗い、櫛でとき、巾（手ぬぐい）を使って髪を乾かし、髻（もとどり）を結います。衾（夜具）を使って遺体が周囲から見えないようにカバーしてから遺体を洗い、巾（手ぬぐい）を使って遺体をふき、爪をきります。あわせて沐浴に使って余った水、巾（手ぬぐい）、櫛は、穴に捨てて埋めます]。襲（重ね着をさせる）。[従者は、襲牀（上着を着せるための細長い寝台）を幃（周りを囲む幕）の外に用意し、薦席（敷物）、褥（夜具）、枕（まくら）を広げ、まず深衣（礼服）、袍襖（上着）、汗衫（女子用の上着）、袴襪（袴と足袋）、勒帛（腰をたばねる帯）、裹肚（腹巻き）の類をその上に置きます。手に持って入ったら、浴牀（体を洗うための細長い寝台）の西に置き、尸（遺体）をその上に移動させ、病気のときに身につけていた衣服をすべて取り去り、新しい衣服に着替えさせます。ただし幅巾（頭をつつむ布）、深衣（礼服）、履（靴）はま

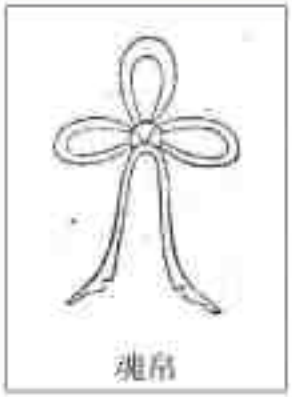
だ身につけさせません]。尸牀（死者の寝床）を移し、堂（表座敷）の真ん中に置きます。[卑幼（目下の人）であるときには、それぞれ室（部屋）の真ん中にいます。その他、在堂と言われる人（親が存命である人）は、これを手本とします]。そこで奠（お供え物）を用意します。[執事は、卓子（机）を使って脯（干し肉）と醢（肉の塩から）を置き、阼階から登ります。祝（祝詞をあげる人）は、手を盥（たらい）で洗い、盞（杯）を洗い、酒をくみ、尸（遺体）の東、ちょうど肩のあたりにお供えし、死者の顔に巾（布きれ）をかぶせます。祝（祝詞をあげる人）は、親族にならせます]。主人以下は、位置について、大声をあげて泣きます。[主人は、牀（細長い寝台）の東、奠（お供え物）の北に座ります。一族の男たちで三年の喪に服する人は、その下に座ります。全員がわらをしきます。同姓の一族で、期（一年の服喪）、大功（9カ月の服喪）、小功（5カ月の服喪）をしないといけないとき、それぞれ服喪の期間に応じて順番を決め、一族の男たちの後に座っていきます。全員が西に向き、南が上となります。尊行（目上の人）は、年長と年少の序列に従って、牀（細長い寝台）の東北の壁の下に座ります。南に向き、西が上となります。席薦（むしろ）をしきます。主婦や一族の女たちは、牀（細長い寝台）の西に座ります。わらをしきます。同姓の女性は、服喪の期間に応じて順番を決め、主婦や一族の女たちの後に座っていきます。全員が東に向き、南が上となります。尊行（目上の人）は、年長と年少の序列に従って、牀（細長い寝台）の西北の壁の下に座ります。南に向き、東が上となります。席薦（むしろ）をしきます。側室や下女は、一族の女性たちの後に立ちます。別に幃（とばり）を用意して、内外（男女）をへだてます。異姓（配偶者の一族）の親や丈夫（成人した男性）は、幃（とばり）外の東に座ります。北に向き、西が上となります。婦人（成人した女性）は、幃（とばり）外の西に座ります。北に向き、東が上となります。全員が席（むしろ）をし、服喪の期間の長い順にならびます。服喪の期間のない人は、その後にならびます。もし一門の葬式であるときには、同姓（本人の一族）の丈夫（成人した男性）は、目上と目下の序列に従って幃（とばり）外の東に座ります。北に向き、西が上となります。異姓（配偶者の一族）の丈夫（成人した男性）は、幃（とばり）外の西に座ります。北に向き、東が上となります。三年の喪に服する人は、夜になれば尸（遺体）の傍らに寝ます。わらをしいて、土くれを枕とします。病弱な人は、草薦（ござ）をしいても、さしつかえありません。期（一年の服喪）以下の喪に服する人は、非常に近いところに寝て、男女は室（部屋）を別にします。外親（母方の親族）は、家に帰っても、さしつ

尸牀＝死者の寝床

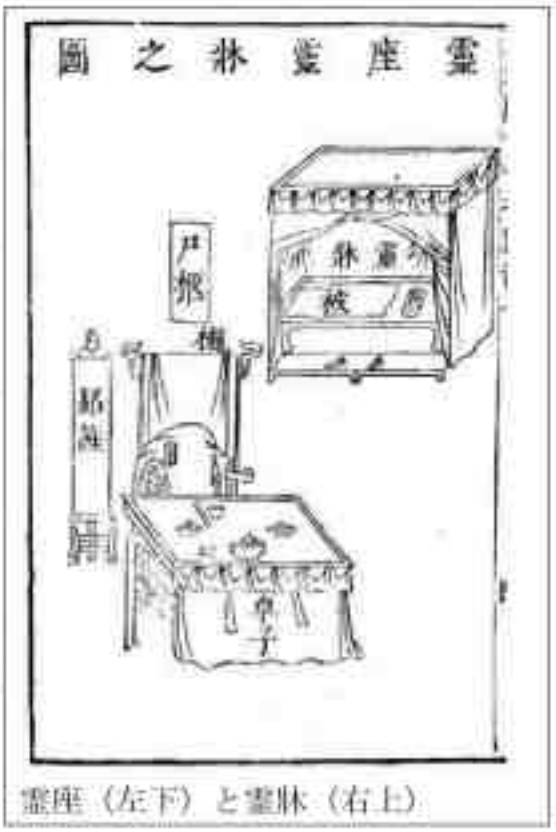
かえありません]。そこで飯含（死者の口の中にものを含ませること）をします。［主人は、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくし、左の肩はだを脱ぎ、みずから脱いだ部分を腰の右にさしこみます。盥（たらい）で手を洗い、箱を手に持って入ります。従者の一人は、スプーンを米盥（米のお椀）をさし、手に持って主人についていき、尸（遺体）の西に置きます。それから幅巾（頭をつつむ布）を持って入り、枕をのけ、顔を覆います。主人は、尸（遺体）の東につき、その足もとから西に行き、牀（細長い寝台）の上に座ります。東に向いて顔の巾（布きれ）を持ち上げ、スプーンを使って米をすくい、尸（遺体）の口の右に入れます。それと一緒に一枚の銭をいれます。それから口の左にも中に入れ、これまた同じようにします。主人は、片はだ脱いでいた着物を重ねて着て、もとの位置に戻ります］。従者は、重ね着をさせ終わったら、衾（夜具）をかぶせます。［幅巾（頭をつつむ布）と充耳（耳につめる飾りもの）をつけ、幎目（死者の顔をおおく布）をととのえ、履（靴）を収納します。それができたら、深衣（礼服）を重ね着させ、大帯を結び、握手（死者の手を結ぶ布）をととのえます。それができたら、衾（夜具）をかぶせます］。

第３章　霊座、魂帛、銘旌

霊座（死者のための座席）を置き、魂帛（白い絹でつくられた形代で、生まれた年月日と死んだ年月日を記したもの）を用意します。［櫛（衣かけ）を尸（遺体）の南に用意し、帕（ものをつつむ布きれ）で覆い、倚卓（イスとテーブル）をその前に置きます。白い絹を結んで魂帛（白い絹でつくられた形代で、生まれた年月日と死んだ年月日を記したもの）をつくり、倚（イス）の上に置きます。香炉、香合（お香を入れる容器）、玟杯（占いに使う道具）を用意し、果物の入った酒を卓（テーブル）の上につぎます。従者は、朝に夕に櫛（髪をとく）、顔（顔を洗う）、奉養（養う）のための道具を用意します。それは生前と同じようにします。司馬公は、こう言っています。「昔は木をのみで彫って重（仮の位牌）をつくり、そうしてその神を尊びました。今の令式（規則）にも、これがあります。しかしながら、士民（役人と庶民）は、これをいまだに理解していません。ですから、帛（絹）をたばねて神をよりつかせるためのものとしたものを使って、これを魂帛と言っています。これもまた昔の礼のなごりです。世俗では全員が肖像


魂帛

画を描き、魂帛（白い絹でつくられた形代で、生まれた年月日と死んだ年月日を記したもの）の背後に置いています。男子は生前に肖像画を描いていれば、それを使い、気にしていません。婦人（成人した女性）になると、生前は家の奥にいて、出るときには幅輦（前後に仕切りのある婦人用の車）に乗り、その顔を隠しています。死んだとき、どうして画工（絵を描く職人）をまっすぐ奥の室（部屋）に入れ、顔を覆っている帛（絹）を持ち上げ、筆を手にもって死者をよく見て、その容貌を描かせることができるでしょうか。これは、とても非礼になります。さらに世俗では、場合によって冠帽（冠と帽子）、衣履（衣服と靴）、装飾（アクセサリー）を使って人のような形にしていますが、これは特に下品であり、従うべきではありません」]。銘旌（死者の官位や姓名などを書いた旗）を立てます。



靈座（左下）と靈牀（右上）

［絳帛（赤い絹）を使って銘旌（死者の官位や姓名などを書いた旗）をつくります。幅は1幅（2尺2寸）を基準とします。官位が三品以上は9尺、五品以下は8尺、六品以下は7尺となります。「某官某公之柩」と書きます。仕官していないなら、その生前の呼び名に応じたものとします。竹を使って杠（旗竿）をつくります。その長さは、竹を採ってきたときの長さのままにします。靈座の右に置きます］。仏事を行いません。［司馬公は、こう言っています。「世俗は、仏教の誘惑を信じ、死んでから七十七日目、百日目、一年目、二年目、除喪（服喪の終わりのとき）になると、僧侶にごちそうし、道場（仏を供養するところ）を用意します。場合によっては、水陸大会（水陸の動物に食事をお供えする法要）を行い、経典を書きうつし、像を造り、仏塔と祖廟を建て、「こうすれば、満天の罪悪を消滅させ、必ず天国に生まれかわり、いろいろな快楽を受ける。そうしない者は、必ず地獄に入り、剉（切る）、焼（焼く）、舂（つく）、磨（とぐ）など、無限に続く声が出ないくらいの苦しみを受ける」と言います。まったくわかっていません。人は生まれ、体内に気と血がめぐり、痛みを知るようになります。爪を切ったり、髪を剃ったりして、それをそのまま

銘旌

焼いたとしても、まったく苦しみを感じません。ましてや死者は、陰陽の二気がすでに分離しています。陰気はと言うと、地下に入り、朽ちて消滅し、石や木と一緒になります。陽気はと言うと、ふわふわとただよって、風や火のようになり、どのようになっているのかわかりません。剉（切る）、烧（焼く）、舂（つく）、磨（とぐ）などの苦しみを与えようにも、どのようにして与えればよいのでしょうか。しかも、仏教徒が言う天国と地獄の話は、勧善懲悪が実現されるように計らうものでもあるとしていますが、もし確実に公正に実行しなければ、鬼といえども、どうして治められるでしょうか。そういうわけで、唐代の盧州刺史（盧州の長官）であった李丹は『与妹書』に「天国がないなら、それまでだし、あるなら君子（りっぱな人）が行くだろう。地獄がないなら、それまでだし、あるなら小人（だめな人）が行くだろう」と言っているのです。世の中の人は、親が死ぬと、仏陀に祈ります。これは、その親を君子としないで、悪を積み重ねてきた罪深い小人だとする行為です。どうして親に対して薄情なことをするのでしょうか。その親をまったく悪を積み重ねてきた罪深いものであるとしているのですから、どうして仏陀に賄賂を贈って免れることができるでしょうか。以上のことはと言うと、人並みの知恵をもっている人なら、だれもが知っていることです。しかし、世間はこぞって仏教を信奉しています。どうして迷信に惑いやすくて、真実を理解しにくいのでしょうか。はなはだしい人は、仏陀のために家を傾けて破産するまで寄付をします。以上のようにするより、どうしてさっさと田畑を売り、墓地をつくって、葬らないのでしょうか。天国と地獄というものが、もしあるとするなら、天地ができたときに一緒に生まれているべきです。仏教の教えが中国に入ってくる前から、人が死んで息を吹き返すということもありました。どうして仏教の教えに従っていないのに一人としてまちがって地獄に落ち、閻魔大王や羅漢などの十王に会うということがなかったのでしょうか。学んでいない人はもちろん言うまでもありませんが、書物を読んで歴史を知っている人も少しは悟ることができるでしょう」]。

襲を終え、霊座を用意し、親しい人物が入って大声で泣くことに関する図

親友（親友）で、関係の密接であった人は、ここまできたら、入り、大声をあげて泣いても、さしつかえありません。[主人がまだ服喪を終えていないとき、死者

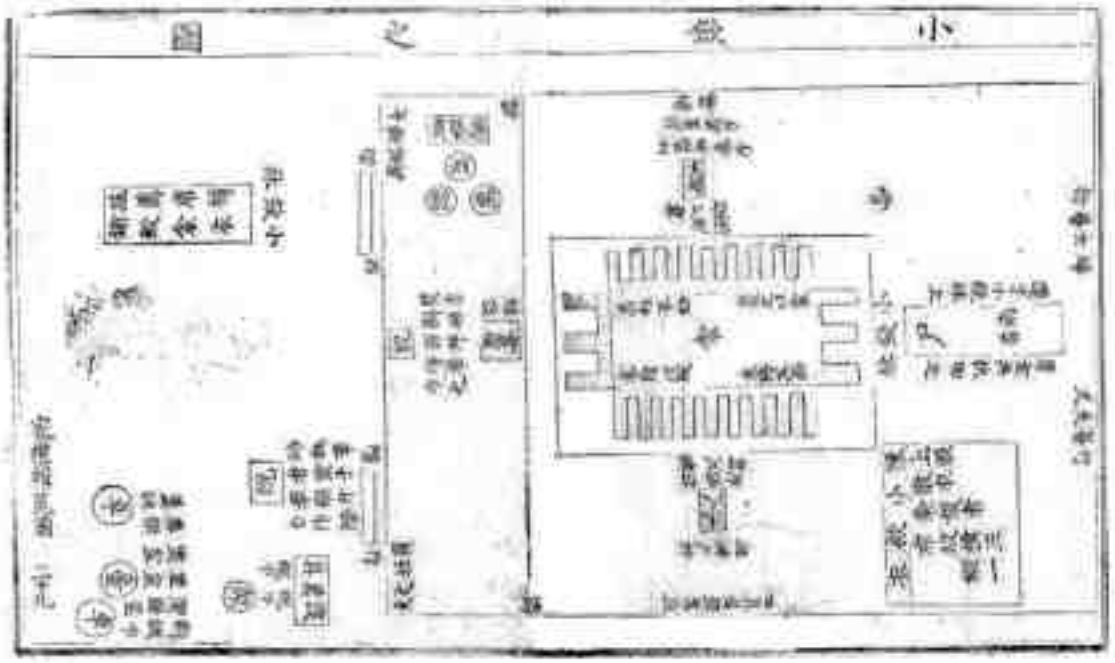
を弔うために大声をあげて泣きにきた人は、深衣（礼服）を着用すべきで、尸（遺体）を前にしたら、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。それから出て、靈座におじぎし、お香を焚き、再度おじぎします。それで弔い終わります。主人は、その弔問客と一緒に大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。主人は、このように弔問客と一緒に大声をあげて泣く以外は、弔問客と会話しません］。

第４章　小斂（死亡の翌日に遺体を堂中に移して着替えさせること）。［袒（肩はだをぬぐこと）、括髮（男性の喪中の髪形）、免（冠をぬいで白布で髪をつつむこと）、髽（女性の喪中の髪形）、奠（お供え物をすること）、代哭（交代で大声をあげて泣くこと）］

その翌日［死亡の翌日を言います］、執事は小斂（死亡の翌日に遺体を堂中に移して着替えさせること）のための衣衾（衣服と夜具）をならべます。［卓（机）を使って堂（表座敷）の東北の壁の下にならべます。死者がもっていた衣服の中から、最適なものを選んで使います。もし多いときには、必ずしも全部を使う必要はありません。衾は、復（死者が息を吹きかえすのを願う儀式）に使うものです。絞（遺体を結ぶための布）は、横向きに結ぶためのものが３つ、縦向きに結ぶためのものが１つです。すべて一幅の細い布もしくは繰（美しい絹）を使って、その両端から切り離して３本をつくるようにします。横向きに結ぶための布は、十分に身体をめぐらせて結べるだけを取ります。縦向きに結ぶための布は、十分に頭の先から足の先までを覆って、体の真ん中で結べるだけを取ります］。奠（お供え物）を用意します。［卓子（机）を阼階の東南に用意し、奠饌（お供え物）と盉注（杯と水さし）をその上におき、巾（布きれ）をかぶせます。盥盆（桶や皿）と帨巾（手ぬぐいやフキン）を饌（お供え物）の東にそれぞれ２つずつ用意します。その東には台があって、祝（祝詞をあげる人）が手を洗うところとします。その西には台がなく、執事が手を洗うところとします。別に卓子（机）を使ってきれいに洗った盆を用意し、その東に新しい拭巾（ふきん）を置きますが、盉を洗って盉をふくためです。ここの部分は、棺を安置するまで同様にします］。括髮麻（括髮に使う麻）、免布（免に使う布）、髽麻（髽に使う麻）をととのえます。［括髮とは、麻縄で髻（もとどり）を結うこと、さらに布を使って頭巾をつくることを言います。免とは、布もしくは絹の広いほうの辺を裂き、頭のうしろから前にまわして額の上で交わらせ、もとに戻して掠頭をつけるように髻（もとどり）にめぐらすことです。髽も、麻縄で髻（もとどり）を結い、竹や木が笄（かんざし）となります。これをすべて別室に用意します］。小斂（遺体の着替え）のための牀（細長い寝台）、布絞（遺体を結ぶための布）、衾衣（夜具と衣服）を用意します。［小斂（遺体の着替え）

のための牀（細長い寝台）を用意し、薦（むしろ）、席（敷物）、褥（夜具）を西階の西に広げ、絞（遺体を結ぶ布）、衾（夜具）、衣（衣服）をしいて持ち上げ、西階から登り、尸（遺体）の南に置きます。まず布絞（遺体を結ぶ布）の横に結ぶためのもの３つを下に置いて、遺体をめぐらして結ぶ準備をします。そこで布（遺体を結ぶ布）の縦に結ぶためのもの１つを上に置いて、頭から足までを覆う準備をします。衣（衣服）は、さかさまにしたり、さかしまにしたりしてもかまいませんが、ただしその形がととのうように置きます。ただ上衣（上着）だけはさかしまにしません］。そこで遺体を移動させ、奠（お供え物）を取り替えます。［執事は、遺体を移動させて霊座の西南に置き、新しい奠（お供え物）が用意されるのを待ち、そこで前のものを取り去ります。その後、およそ奠（お供え物）は、すべてここにならべるようにします］。終わったら、小斂を始めます。［従者は、盥（たらい）で手を洗い、尸（遺体）を持ち上げ、男女が一緒にこれを手助けし、小斂（遺体の着替え）のための牀（細長い寝台）に移動させます。先ず枕を取り去って、絹を広げ、衣（衣服）を畳んで、そうしてその首の下にしきます。そのうえ両端を巻いて、そうして両肩のすきまをうめます。さらに衣を巻き、その両方の腥（すね）をはさみ、その形がととのうように置きます。それから余った衣（衣服）を使って尸（遺体）を覆い、左衽（衣服の左えりが内側になるようにすること）をし、衣服の前は結ばず、つつむにあたっては衾（夜具）を使います。しかし、まだ絞（遺体を結ぶ布）を結びませんし、まだその顔を覆いません。思うに親孝行な子は、やはり親が生き返るのを待ち、ときどきその顔を見たいと望むからです。斂（遺体を棺に納めること）が終われば、衾（夜具）を使って覆います］。主人と主婦は、尸（遺体）にとりつき、胸を打ちながら大声をあげて泣きます。［主人は、西に向いて、尸（遺体）にとりつき、胸を打ちながら大声をあげて泣きます。主婦も、東に向いて、主人と同じようにします。およそ子が父母に対して行うときは、とりつきます。父母が子に対して行うときや、夫が妻に対して行うときは、手を取ります。婦人が舅姑（夫の父母）に対して行うときは、ささげ持ちます。舅（夫の父）が婦人に対して行うときは、なでます。兄弟に対して行うときは、手を取ります。およそ尸（遺体）にとりつくのは、父母が先で、妻子が後です］。別室において、袒（肩はだをぬぐこと）、括髮（男性の喪中の髪形）、免（冠をぬいで白布で髪をつつむこと）、髽（女性の喪中の髪形）を行います。［男子で斬衰（三年の服喪）の人は、袒（肩はだをぬぐこと）と括髮（男性の喪中の髪形）を行います。斉衰（一年の服喪）以下、同五世祖（五世代前の祖先の子孫たち）に至るまでの人は、全員が袒（肩はだをぬぐこと）と免（冠をぬいで白布で髪をつつむこと）を行います。別室において行います。婦人は、別室において、髽（女性の喪中の髪形）を行います］。尸牀（遺体を寝せる細長い寝台）をもと

に戻して、堂（妻座敷）の真ん中に移動させます。［執事は、襲牀（遺体を着替えさせるための細長い寝台）を片づけ、尸（遺体）を安置すべきところに移動させます。哀悼の意を表して大声で泣いている人は、もとの位置に戻ります。尊長（目上の人）は座り、卑幼（年少の人）は立ちます］。そこで奠（お供え物）をします。［祝師（神官）と執事は、盥（たらい）で手を洗い、饌（お供え物）を持ち上げ、阼階より登ります。霊座の前まで行ったら、祝（祝詞をあげる人）はお香を焚き、盞（杯）を洗い、酒をくみ、奠（お供え物）をします。卑幼（年少の人）は、全員が二度おじぎします。従者は巾（布きれ）をかぶせます］。主人以下全員は、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。そこで代哭（交代で大声をあげて泣くこと）をし、鳴き声が絶えないようにします。

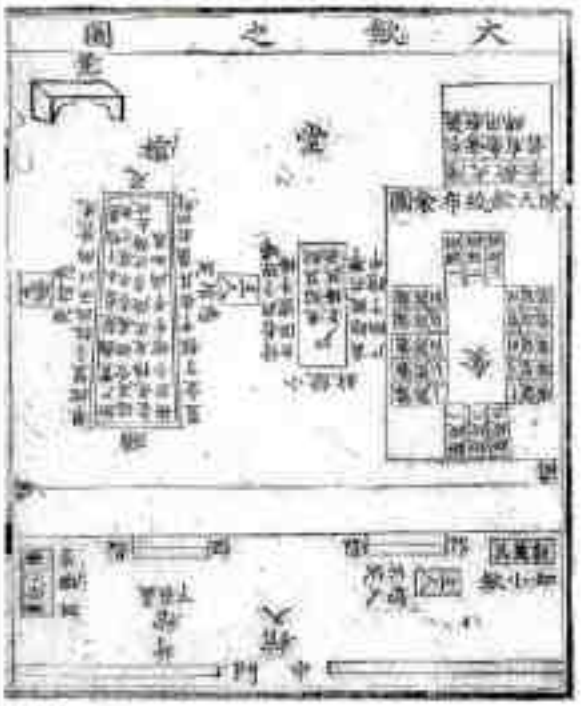


小斂の図

第５章　大斂（小斂の翌日に遺体を棺に納めること）

その翌日［小斂の翌日、死んでから三日目です。司馬公は、こう言っています。『礼記』に「三日してから納棺するのは、その生き返りを待つためです。三日にして生き返らないときには、もう生き返りません。ですから、三日を区切りとして大斂（小斂の翌日に遺体を棺に納めること）の礼法を行うのです」とあります。今の貧しい人は、葬式の道具がまだ用意できていないからとか、棺の漆がまだ乾いてないからと言って、三日を過ぎても、心配することがありません。世俗では、陰陽による吉凶の判断を使って、忌日にとらわれて、吉日を選んで納棺しています。とても暑いとき、そうこうしているうちに遺体から汁が出て、遺体に虫がわいてくるようになります。どうして道理に背いていな

いと言えるでしょうか」]、執事は大斂（小斂の翌日に遺体を棺に納めること）のための衣衾（衣服と夜具）をならべます。[卓子（机）を使って堂（表座敷）の東の壁の下にならべます。衣（衣服）に定められた数量はありません。衾は縮のあるものを用います]。奠（お供え物）の道具を用意します。[小斂の作法のようにします]。棺を持ち上げ、堂（表座敷）の真ん中のやや西に入れます。[執事は、まず霊座と小斂の奠（お供え物）を傍らに移動させます。人足は、棺を持ち上げて入り、牀（細長い寝台）の西に置き、二つの凳（腰かけ）で受けます。もし卑幼（年少の人）であるときには、別室に置きます。人足は出ます。従者は、まず衾（夜具）を棺の中に置き、その奩（すそ）を四方の外に出します。司馬公は、こう言っています。「周代の人は、西階の上において殯（かりもがり）をしました。今の堂室（表座敷と奥座敷）は、つくりが異なっていますし、場合によっては狭小です。ですから、ただ堂（表座敷）の真ん中のやや西に置くだけなのです。今の世俗では、多くが僧舎において殯（かりもがり）をしており、見守る人がいません。おうおうにして年月がよくないとして、数十年を経過しても葬らず、盗賊に荒らされたり、僧侶に捨てられたりします。親不孝の罪として、これより大きなものがあるでしょうか」]。そこで大斂（小斂の翌日に遺体を棺に納めること）を行います。[従者は、子孫や婦女と一緒に盥（たらい）で手を洗い、頭を覆い、絞（遺体を結ぶ布）を結び、一緒に尸（遺体）を持ち上げ、棺の中に納めます。生前に抜けた歯や切った爪は、棺のすみに入れます。さらに棺と遺体の間にできた隙間をととのえ、衣（衣服）を巻いて隙間に入れ、隙間がなくなるように務めます。このとき揺らしてはいけません。慎重になって棺の中に宝石や珍品を棺の中において、盗賊に盗もうという気を起させることがないようにします。遺体を棺に入れるにあたり、衾（夜具）は先ず足を覆い、次に頭を覆い、次は左を覆い、次は右を覆い、棺の中を平たく満たします。主人や主婦は、とりついて大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。婦人は、退いて幕の中に入ります。そこで大工を呼び、棺に蓋をさせます。釘をうち、牀（細長い寝台）を片づけ、柩を衣服で被います。祝（祝詞をあげる人）



大斂の図

は、銘旌を取り、跗（銘旌を立てるための足場）を柩の東に用意し、再び霊座をもとの場所に用意します。婦人２人をとどめて、守らせます。司馬公は、こう言っています。「およそ尸（遺体）を動かし、柩を持ち上げるにあたり、数えきれないくらいに胸を打ちながら大声をあげて泣きます。しかしながら、斂殯（納棺し、かりもがりをすること）を行うときも、大声で泣くのをやめて状況を確認し、務めて遺体が安定し、固定されるようにさせます。ただ大声をあげて泣くだけではいけません」。考えてみると、昔は大斂（納棺）をしてから、殯をしていました。大斂（納棺）をし終わったときには、甓（焼いていない煉瓦）を重ねて棺に塗っていました。今は場合によっては漆を塗っていますが乾きませんし、さらに南方の土の中には蟻が多くいて、殯（かりもがり）のときに塗ることができません。ですから、そのつど最適な方法を選ぶようにします]。霊牀（死者のための寝床）を柩の東に用意します。[牀帳（寝台のとばり）、薦席（むしろ）、屏枕（寝具）、衣被（衣服）の類は、すべて生前のようにします]。そこで奠（お供え物）を用意します。[小斂（死亡の翌日に遺体を堂中に移して着替えさせること）の作法のようにします]。主人以下は、それぞれ葬式における席次に戻ります。[中門の外において、地味で質素な室（部屋）を選んで、丈夫（成人した男子）の葬式における席次とします。斬衰（三年の服喪）である人は、苫（とまむしろ）に寝て、塊（つちくれ）を枕にし、絰帶（服喪ときに頭と腰に巻く麻の帶）をはずさず、人と座を一緒にしません。会うべきでないときに母に会うときには、中門まで行きません。斉衰（一年の服喪）である人は、席（敷物）に寝ます。大功（九か月の服喪）、小功（五か月の服喪）、緦麻（三か月の服喪）であり、別居している人は、殯（かりもがり）をし終わったら帰り、よそで寝泊まりし、三か月したら座敷に戻ります。婦人は、中門の中にある別室、もしくは遺体を安置している近くを席次とします。帷帳（とばり）と衾裯（夜具）の華麗なものを取り去ります。男子の葬式における席次に近づいてはいけません]。代哭（交代で大声をあげて泣くこと）を止めます。

銘旌を立て、霊牀と奠を用意することに関する図

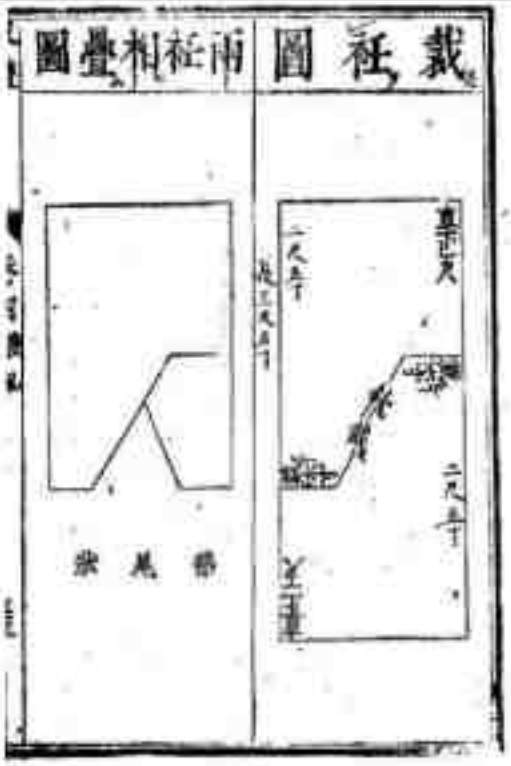
第６章　成服（喪服をつけること）

その翌日［大敏の翌日、死んでから四日目です］、五服（服喪する期間の違いに応じた５種類の喪服）をつける必要のある人は、それぞれ自分の場合に応じた喪服をつけ、入って位置につきます。それから朝哭（朝に大声をあげて泣くこと）をし、お互いに弔いあうときは作法のようにします。

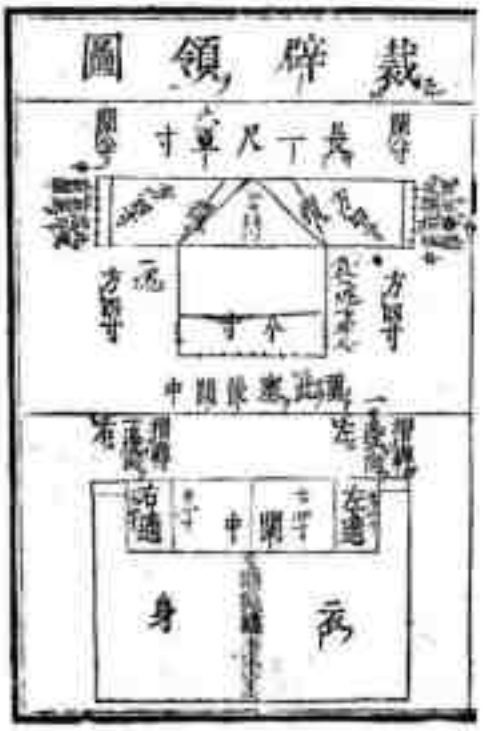
その服の制度は、第一に斬衰（粗い麻の布でつくられた、すそを縫っていない喪服）を着用するのは、三年です。［斬は、縁を縫わないということです。衣裳（上半身に着ける衣服と下半身に着ける衣服）は、すべてきわめて粗い生地を使い、傍らと下の際は、すべて縁を縫いません。裳（下半身に着ける衣服）は、前が３幅、後が４幅です。縫い方は内向きです。前後は連なりません。幅ごとに３つの襞（かど）をつくります。襞とは、その両辺を曲げ、互いにくっつけて、その中を空洞にすることです。衣（衣服）の長さは、腰を過ぎ、十分に裳の上の際を覆えるものにします。縫い方は外向きです。背には負板（粗い麻の布きれ）をつけ、８寸平方の布を使い、領（えりくび）の下に綴って垂らします。前の真ん中には衰（胸につける四角い布きれ）をつけ、縦の長さ６寸、横の広さ４寸の布を使い、左の衿（えり）の前に縫います。左右には辟領をつけ、それぞれ８寸四方の布を使い、その両方の頭を曲げ、お互いにつけ、横の長さを４寸にします。

斬衰

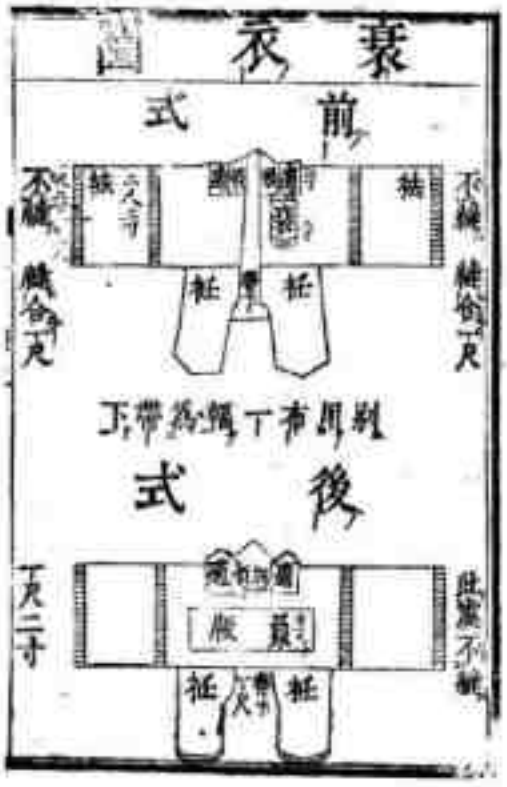
それを領（えりくび）の下に綴り、負板の両横において、それぞれ負板１寸をさします。両方の腋（わき）の下には衽（えり）をつけ、それぞれ３尺５寸の布を使います。その上下は、それぞれ１尺ずつ残し、１尺以外については、上は左横に６寸を裁ち入れ、下は右横に６寸を裁ち入れ、そこで最後のところで互いに向かい合わせて斜めに裁ちます。それから戻って、二つの直線部分を互いに重ね、衣（衣服）の両横に綴り、燕尾のようなかたちで下向きに垂らします。冠は、衣裳にあわせ、やや細い布を使い、紙と糊で材料をつくります。横の長さは３寸で、縦の長さは頭のてっぺんを十分にまたげるものにします。３つの襞（かど）をつくり、すべて右に向けて縦に縫います。麻縄１本を使い、頭上から縄をまとめて頭のてっぺんの後ろにまわし、そこで交差させて前を過ぎ、それぞれ耳の後ろをとおして結び、そうして武（冠をまくもの）をつくります。冠の両方の頭を武の内側に入れ、外に向かって反対に曲げ、武に縫いつけます。武の余った縄は、下に垂らして纓（冠のひも）とし、あごの下で結びます。首絰（頭にまく麻の縄）は、有子麻を使ってつくります。その周囲は９



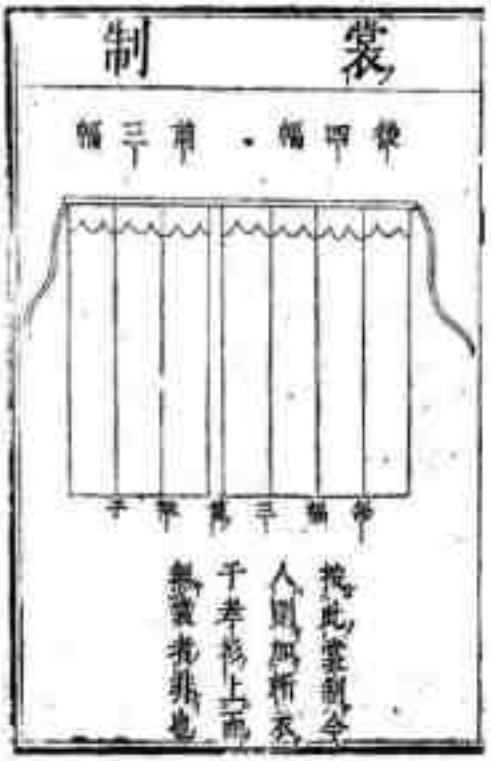
衽



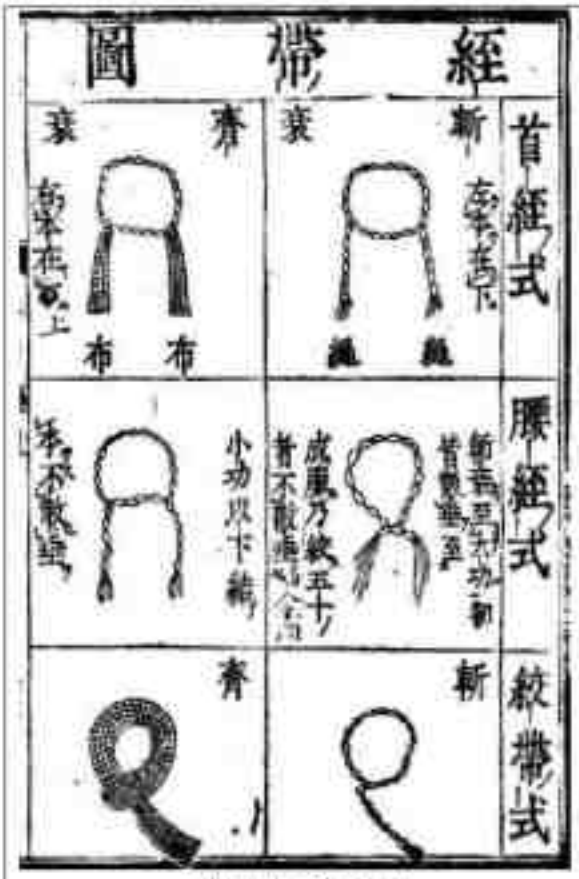
袵領を裁つ図



衣の前後



裳



頭と腰に巻く縄

冠

すで、麻の始点は左において、額の前から右にむかって回していき、てっぺんから頭の後ろを過ぎ、そうしてその終点を始点の上につけ、さらに縄を使って纓（冠のひも）をつくって固定します。これは冠の制式のようにします。腰絰（腰にまく麻の縄）は、周囲の長さが７寸余りで、両方の股のところで互いに交差させ、両端を結びます。それぞれ麻の始点を残し、３尺を散らすように垂らします。その交差させて結んでいるところは、それぞれ細い縄を使ってつなぎます。絞帶は、有子麻の縄１本を使います。大半は腰絰（腰にまく麻の縄）の中で曲げ、二つの股をつくります。二つの股は、それぞれ１尺余りです。そこでこれを合わせますが、その大きさは腰絰のような感じで、腰に回し、左から後ろを過ぎて前に至り、そこでその右端を２つの股の間にさしこみ、そして右に反対にさしこみ、腰絰の下にあるようにします。苴杖は竹を使い、高さは心臓のあたりに合わせ、根本は下にあります。屨も、粗い布でつくります。婦人はと言うと、きわめて粗い生地を使い、大袖（上半身に着ける衣服）、長裙（下半身に着ける衣服）、蓋頭（頭にかぶる布）をつくります。すべて衣服のへりを縫い合わせません。頭につける布、竹のかんざし、麻の靴を身につけます。側室はと言うと、背子（女性の礼服）を使って大袖の代わりとします。およそ婦人は、全員が杖をつきません。その正服〔本来の服喪に服す

ること）はと言うと、子は父のために斬衰を着用します。その加服（本来の服喪よりは重い服喪に服すること）はと言うと、嫡孫（嫡子の本妻の生んだ男子）で、父が亡くなっている人は、祖（祖父）のために斬衰を着用します。もしくは曾祖（父の祖父）、高祖（祖父の祖父）の相続人のために斬衰を着用します。父は嫡子のために斬衰を着用しますが、これは後継者のためにすべき場合です。その義服（義理の服喪）はと言うと、婦人は舅（夫の父）のために斬衰を着用します。夫が相続しているときには、従服（配偶者の服喪にあわせて服喪すること）をします。他家の後継者になっている人は、義父のためにしますし、義理の祖（祖父）の相続人のために斬衰を着用します。夫が他家の後継者になっているときには、妻は従服（配偶者の服喪にあわせて服喪すること）をします。妻は夫のために服喪し、側室は主人のために斬衰を着用します]。

第二に斉衰（斬衰の次に粗い麻でつくられた、すそを縫っている喪服）を着用するのは、三年の場合があります。[斉とは、縁を縫うことです。その衣（上半身に着ける衣服）、裳（下半身に着ける衣服）、冠の制式は、いずれも斬衰のようにします。ただ次の等級の生地を使い、その傍と下の際の縁を縫います。冠は布を使って武（冠をまくもの）と纓（冠のひも）をつくります。首絰（頭にまく麻の縄）は、無子麻を使ってつくります。周囲の長さは7寸余りで、根本は右にあり、末端は根本の下にある布でつくられた纓（冠のひも）につながります。腰絰（腰にまく麻の縄）は、周囲の長さが5寸余りです。絞帶は、布を使ってつくります。そして、その右端1尺余りを曲げます。杖は桐を使ってつくり、上は丸くし、下は四角にします。婦人の喪服は、斬衰と同じです。ただし布は次の等級の生地を使うのが違いとなります。あとはすべて以上を手本にします。その正服はというと、子は母のために斉衰を着用します。士の庶子は、その母のために服喪するのは同じです。しかし、父の後継者のために服喪するときには、降服となります。その加服はと言うと、嫡孫（嫡子の本妻の生んだ男子）で、父が亡くなっている人は、祖母、もしくは曾祖母、高祖母の相続人のために斉衰を着用します。母は嫡子のために斉衰を着用しますが、これは後継者のためにすべき場合です。その義服はと言うと、婦人は姑のために斉衰を着用します。夫が相続人であるときには、従服（配偶者の服喪にあわせて服喪すること）をします。継母のために斉衰を着用します。慈母（育ての母）のために斉衰を着用しますが、慈母とは、庶子に母がいないとき、父がその側室で子どものいない人

斉衰

に命じて、その庶子を養育させることです。継母は長子（最初に生まれた男子）のために斉衰を着用します。側室は主人の長子のために斉衰を着用します]。杖期（大きく悲しむ一年）の場合もあります。[喪服の制式は、上と同じです。ただし、次の等級の生地をさらに使います。その正服はと言うと、嫡孫（嫡子の本妻の生んだ男子）で、父が死に、祖（祖父）が存命である人は、祖母のために斉衰を着用します。その降服はと言うと、嫁母（再婚した母）、出母（離婚してから再婚していない母）のために斉衰を着用します。その義服はと言うと、父が死に、継母が嫁いでいて、すでに従っている人のために斉衰を着用します。夫が妻のために斉衰を着用します。子が父の後継者となっているときには、出母（離婚してから再婚していない母）、嫁母（再婚した母）のために斉衰を着用します。無服（服喪の関係がないほど疎遠な関係）で、継母が出ていっているときには、服喪の必要はありません]。不杖期（小さく悲しむ一年）の場合もあります。[喪服の制式は、上と同じです。ただし杖を使わず、次の等級の生地をさらに使います。その正服はと言うと、祖父母のために斉衰を着用します。娘は、嫁入りしていても、降服としません（正式に服喪します）。庶子の子は、父の母のために斉衰を着用します。しかし、祖（祖父）の後継者となっているときには、喪に服しません。伯父や叔父のために斉衰を着用します。兄弟のために斉衰を着用します。衆子（正妻の生んだ長男ではない子どもたち、側室の生んだ子どもたち）である男女のために斉衰を着用します。兄弟の子のために斉衰を着用します。姑姉妹（義理の母の姉妹）の娘で結婚していない人と、嫁入りしたが夫と子のいない人のために斉衰を着用します。婦人の夫と子のいない人は、その兄弟姉妹と、兄弟の子のために斉衰を着用します。側室は、その子のために斉衰を着用します。その加服はと言うと、嫡孫、もしくは曾孫、元孫（玄孫）の後継者となるべき人のために斉衰を着用します。娘で嫁入りしている人は、兄弟のうちで父の後継者となっている人のために斉衰を着用します。その降服はと言うと、嫁母（再婚した母）、出母（離婚してから再婚していない母）は、その子のために斉衰を着用します。子が、たとえ父の後継者となっていても、やはり喪に服すべきです。側室は、その父母のために斉衰を着用します。その義服はと言うと、継母、嫁母（再婚した母）は、前の夫の子で自分に従っている人のために斉衰を着用

します。伯母、叔母のためにします。夫の兄弟の子のために斉衰を着用します。継父の同居している父子には、全員に大功の喪に服すべき親族がいません。側室は女君（夫の正妻）のために斉衰を着用します。舅姑は嫡婦（正妻）のために斉衰を着用します]。五か月の場合もあります。[喪服の制式は、上と同じです。その正服はと言うと、曾祖父母のために斉衰を着用します。娘で嫁入りしている人は、降服をしません]。三か月の場合もあります。[喪服の制式は、上

と同じです。その正服はと言うと、高祖父母のために斉衰を着用します。婿で婦入りしている人は、降服をしません。その義服はと言うと、継父の同居していない人です。それは、先は同じで今は異なっている、あるいは同居していて継父に子がいるとはいえ、すでに大功以上の喪に服すべき親族がいる人です。もとから同居していない人であるときには、服喪しません]。

小功

第三に大功（織り目の粗い麻の布でつくられた喪服）を着用するのは、9か月です。[喪服の制式は、上と同じです。ただしやや粗い熟布（麻の布）を使います。負板（粗い麻の布きれ）、衰（胸につける四角い布きれ）、辟領はありません。首絰（頭にまく麻の縄）は、5寸余りです。腰絰（腰にまく麻の縄）は、4寸余りです。その正服はと言うと、従父兄弟姉妹（父方のいとこ）のために大功を着用します。従父兄弟姉妹（父方のいとこ）とは、伯父や叔父の子のことです。衆孫（嫡孫以外の孫たち）である男女のために大功を着用します。その義服はと言うと、衆子（嫡子以外の子たち）の婦人のために大功を着用します。兄弟の子の婦人のために大功を着用します。夫の祖父母、伯父、叔父、伯母、叔母、兄弟の子の婦人のために大功を着用します。夫が人の後継者となっている場合、その妻は夫を生んだ舅姑のために大功を着用します]。

第四に小功（織り目の細かい麻の布でつくられた喪服）を着用するのは、五か月です。[喪服の制式は、上と同じです。ただしやや熟した細かい布を使います。冠は左に縫います。首絰（頭にまく麻の縄）は、4寸余りです。腰絰（腰にまく麻の縄）は、3寸余りです。その正服はと言うと、従祖祖父、従祖祖姑のために小功を着用します。従祖祖父、従祖祖姑とは、祖（祖父）の兄弟姉妹のことです。兄弟の孫のために小功を着用します。従祖父、従祖姑のために小功を着用します。従祖父、従祖姑とは、従祖祖父の子、父の従父兄弟姉妹（父方のいとこ）のことです。従父兄弟（父方の男のいとこ）の子のために小功を着用します。従祖兄弟姉妹のために小功を着用します。従祖兄弟姉妹とは、従祖父の子、いわゆる再従兄弟姉妹となる人のことです。外祖父母のために小功を着用します。外祖父母とは、母の父母のことです。舅のために小功を着用します。舅とは、母の兄弟のことです。甥のために小功を着用します。従母のために小功を着用し

大功

ます。従母とは、母の姉妹のことです。姉妹の子のために小功を着用します。同母異父の兄弟姉妹のために小功を着用します。その義服はと言うと、従祖祖母のために小功を着用します。夫の兄弟の子のために小功を着用します。従祖母のために小功を着用します。夫の従兄弟の子のために小功を着用します。夫の姑姉妹（父の姉妹）のために小功を着用しますが、嫁入りしている人は降服をしません。娘で、兄弟の姪（おい）の妻となり、すでに嫁入りしている人も、降服をしません。姒婦、娣婦のために小功を着用します。姒婦、娣婦とは、兄弟の妻が互いに呼びあう名前で、長婦（目上の妻）は次婦（目下の妻）のことを「姒婦」と言い、姒婦は長婦のことを「娣婦」と言います。庶子（側室の子）は、嫡母（父の正妻）の父母、兄弟姉妹のために小功を着用します。嫡母が死んでいるときには、喪に服しません。母が出て行っているときには、継母の父母、兄弟姉妹のために小功を着用します。庶母（父の側室）で、自分を養育してくれた人のために小功を着用します。この人は、庶母のうちで乳母となって自分を養ってくれた人のことを言います。嫡孫、もしくは曾孫、元孫の後継者となるべき人の婦人のために小功を着用します。その姑がいないときには、そうではありません。兄弟の妻のために小功を着用します。夫の兄弟のために小功を着用します]。

第五に緦麻（織り目の繊細な麻の布でつくられた喪服）を着用するのは、3か月です。[喪服の制式は、上と同じです。ただし極めて細かい熟布（麻の布）を使います。首絰（頭にまく麻の縄）は3寸、腰絰（腰にまく麻の縄）は2寸で、いずれも熟した麻を使います。纓（冠のひも）も、このようにします。その正服はと言うと、族曾祖父、族曾祖姑のために緦麻を着用します。族曾祖父、族曾祖姑とは、曾祖父の兄弟姉妹のことです。兄弟の曾孫のために緦麻を着用します。族祖父、族祖姑のために緦麻を着用します。族曾祖父、族曾祖姑とは、曾祖父の子のことです。従父兄弟（父方の男のいとこ）の孫のために緦麻を着用します。族父、族姑のために緦麻を着用します。族父、族姑とは、族祖父の子のことです。従祖兄弟の子のために緦麻を着用します。族兄弟姉妹のために緦麻を着用します。族兄弟姉妹とは、族父の子のことです。いわゆる三従兄弟姉妹です。曾孫、元孫のために緦麻を着用します。外孫のために緦麻を着用します。外孫とは、従母兄弟姉妹のことであり、従母の子のことです。外兄弟のために緦麻を着用します。外兄弟とは、姑の子のことです。内兄弟のために緦麻を着用します。内兄弟とは、舅の子の

緦麻